

南部には、住居跡 12 軒、連穴土坑 2 基、集石 8 基、土坑 8 基が見られ、割合に分散した住居及び調理の地域と考えられる。

最南部には、集石 1 基と土坑 10 基が見られるのみであり、土坑の性格次第ではあるが、集落の端部にも当たることから、墓域の可能性も考えられるかも知れない。

東側の小台地は北・南部に分けられよう。北部には、住居跡 10 軒、連穴土坑 8 基、集石 0 基、土坑 16 基と土坑群 2 基が見られ、中央南部に次ぐ住居域と言えるであろう。また、連穴土坑が多いことから、燻製主体の調理域も兼ねているということが言えよう。

南部には、住居跡 5 軒、連穴土坑 0 基、集石 6 基土坑 5 基が見られ、閑散とした住居・調理域と言うことができよう。

西側の小尾根は 1 地域として捉えられ、住居跡 3 軒、連穴土坑 0 基、集石 4 基、土坑 13 基が見られ、小さなまとまりを持つ調理主体の地域と捉えることができると考えられる。また、この地域は、小尾根の東側に偏った場所に遺構が形成されると共に、迫の部分にも調理施設が設けられるという特徴を持っていることが、他の区域とは異なっている。

こうして、遺跡全体として見渡してみると、一時期に形成された遺構の数や在り方で解釈は異なってくるとは思われるものの、やはり、中央の台地部分を中心として発達した集落と考えられ、そこには中央部中部の“広場”的な場所をある程度神聖な場所として捉えて生活が営まれているように思われるのである。その傍証として、中央南部と北部の住居跡は、比高差で約 1.4 m、距離にしても 10 m ほど離れている。これは、住居を何の規制もなく造るのであれば、また、人の性質としてある程度“軒を近くして”集落に家を造る傾向があることからすると、極めて奇異なことを考えられる。また、“所属の欲求”という点からも、離れて住むということはその集落というグループへの所属が弱く、集落の一員として強く受け入れられたわけではないと一般的に考えられることからしても、通常的な在り方とは言えないように思うのである。これは、中央部中部をそうした“規制の場所”として捉えれば容易に理解されることであろう。

道跡は、中央部中部のそのエリアを広く保つように巡っている。西の道の途中からそこに向かう道が分かれており、コンターラインを見ても、その中央には緩やかな U 字形の道の痕跡が見取れるように思われる。

この幅の広い、短い道こそミャンマーの“大きな道”そのものではなかろうか。そうすると、東と西の道は“中位の道”、そこから枝分かれする更に幅の狭い道は“小さい道”ということになり、奇しくも、現在のミャンマーでの道の在り方が、時代や地域を大きく隔てたこの上野原遺跡でも共通する要素として見られるということになり、意義深いことと言えよう。

(2) 前原遺跡

報告書が未刊行であるため遺構の全体像がはっきりしないが、東の道も西の道も共に住居跡や連穴土坑・土坑などの遺構を避けた場所に見られることから、また、傾斜のきつい場所から南向き斜面の安定した場所に向かって曲がって来ており、その意味からも明確な道と言える。東側の道の延長部には明確な U 字状のコンターラインが北へ向かっていることから、東の道はこの傾斜に沿って上へと延びていると言えそうである。上の方では幅が 2～3 m はありそうであることから、“大きな道”に当たり、東と西の道は“中位の道”、途中の幅の狭い部分は“小さい道”ということ言えそうである。

(3) 永泊平遺跡

これも報告書は未刊行であり、詳細は不明であるが、住居跡や土坑・連穴土坑・集石などの遺構からは離れた場所にあり、加えて 3 本の道は図の中央部の最も安定した場所で収束する。図には現われないが、この部分には幅 3～5 m 程の硬化面が見られたと記憶しており、これが“大きな道”に当たりそうである。そうすると、これら 3 本の道は“中位の道”に当たり、枝分かれした幅の狭い道は“小さい道”ということになる。

(4) 上山路山遺跡

報告書も未刊行であるが、斜面の調査であり、遺構は検出されておらず、遺構との関係は捉えられない。西側への割合に急な斜面を下る道であり、この幅から考えると“中位の道”ということになりそうである。

(5) 加栗山遺跡

南側へ割合に緩やかに傾斜する地形の迫部分を下る道であり、幅から考えると“中位の道”ということ言えそうである。

(6) 水迫遺跡

2 軒の住居跡とは離れているものの、1 軒の住居跡と 2 つの炉跡とは極めて近接する位置にあるものの、遺構を切っているものではない。この幅からすると“中位の道”ということになると考えられる。

(7) 二本木遺跡

住居跡などの遺構は切っていない。幅から考えると“中位の道”ということになる。

(8) 加治園遺跡

遺構との重なりはない。この幅から判断すると“中位の道”となる。

(9) 梶ノ原遺跡

集石や配石炉、土坑などの遺構との重なりは見られない。幅から考えると“中位の道”となりそうである。ただ、北側に向けて、コ字状のコンターラインが走っていることから、これは“大きな道”に相当する可能性も考えられ、興味深い。